

『理論経済学の本質と主要内容』と『経済発展の理論』における
シュンペーターの方法論的・理論的構造の再考
ープラグマティスト、ウィリアム・ジェイムズを通じて

小 林 大州介
Daisuke KOBAYASHI

要旨

本報告では、J.A.シュンペーターが『理論経済学の本質と主要内容』と『経済発展の理論』において参照した方法論が「プラグマティズム」である可能性を議論する。シュンペーターが参照した可能性のある方法論として現在、塩野谷祐一の「道具主義」説が有力な説である。塩野谷は主に『本質と主要内容』におけるシュンペーターの記述を基に、彼が理論を道具と見なしており、真偽を問題にしていないことを論拠としてこの説を主張している。確かにシュンペーターは同書において、市場の複雑な機構を「関数関係」に置き換え、それに関する様々な仮定についてその真偽を問わないという主張を繰り返しており、また塩野谷は『経済発展の理論』で彼が設定した諸命題や、社会経済学を理論として確立するための仮定なども道具主義で説明可能であるとしている。しかし本稿では代替的な解釈として、シュンペーターが参照したのが「プラグマティズム」である可能性を検討した。

シュンペーターも『経済分析の歴史』で認めている通り、プラグマティズムは当時の「時代精神の主要な潮流」と衝突することは無く、道具主義を含む様々な方法論を取り入れたものである。またシュンペーターが尊敬をしていたマックス・ウェーバーや、彼が LSE で受けた講義を担当したシドニー・ウェッブなどもプラグマティズムに興味を抱いており、「歴史」を科学的に説明する観点からプラグマティズムを使っている。よってプラグマティズムは、「道具主義」説では比較的弱い「動態論」や「社会経済学」における方法論的解釈に対して代替的な説明を提供してくれるものと期待される。

1. はじめに

シュンペーターに世界的名声を与えた彼の主著、『経済発展の理論』の最大の特徴は「静態」と「動態」という、二つの異なる分析理論を用意したことにある。均衡状態を基礎として、同じ規模の経済活動が每期繰り返される「静態」と、企業者が現れて静態的経済循環を攪乱し、経済発展を引き起こす「動態」とを区別することにより、シュンペーターは利子の持続性や恐慌現象の解明といった具体的問題に対し、ユニークな説明を提示することできた。

この分析方法がどのような知的環境の下で彫琢されてきたか、また動態現象の中核になぜ「企業者」を置こうと考えたのかという事に関して、これまで様々な議論が展開されてきた。特に中心的に議論されているものとしては、オーストリア学派の C・メンガーと、ドイツ歴史学派 G・シュモラーの間で交わされた、いわゆる「方法論争」の影響がある。¹多くの議論で一致しているのは、均衡分析を中心とする純粋経済学と、そして「発展」を説明する歴史的研究との方法論的・理論的・融和が、彼の「経済発展」の特徴だという点である。しかし、それぞれ方法論の異なる二つの体系をいかに一つに融合しえたのか。

現在、多くの研究者が支持しているものとして塩野谷祐一(1995)の説明がある。シュンペーター(1908)は『理論経済学の本質と主要内容』(以下『本質と主要内容』)において、方法論争を「実用主義的 (pragmatisch)」な方法で解決すると宣言しているが、塩野谷(1995)はこれを物理学者、E・マッハ流の「道具主義」と解釈する。彼はシュンペーターが「道具主義」的解釈によってワルラス流の純粋経済学の有用性を認め、歴史研究との区別をはかりつつ、方法論争の融和を行ったことを指摘した。

『本質と主要内容』におけるシュンペーターの「純粋経済理論」に対する説明を見ると、塩野谷(1995)の解釈は明瞭であり、説得性の高いものである。しかし同時に、この有力な解釈が広く受容されて以来、代替的な解釈がなかなか出てこないのも事実である。「道具主義」はシュンペーターの「純粋経済学」に対する態度を説明するものであることは確かなのだが、マッハ流の道具主義によって、彼の「動態」の形成までも説明して良いものであろうか。他に、潜在的に有力な解釈は存在しないのだろうか。もし、「道具主義解釈」の影響力の大きさゆえに代替的な解釈を探る動きが下火となっているのであれば、これは「経済発展の理論」に至るビジョン形成の研究において、不幸なことであると考ええる。

本稿では、シュンペーターの方法論形成に影響を与えた可能性のある方法論の対案として、プラグマティズムを挙げようと思う。この解釈に関連して

近年では佐々木憲介(2018)も検討している。

また、シュンペーターがウィーン大学に在学中の 1900 年代に、同じく方法論争を克服しようとしていた M・ウェーバーにも、当時流行していたプラグマティズムの影響が見られる。彼は著作において、シュンペーターと同様の「プラグマティッシュな方法」という表現で、理論経済学の妥当性の説明及び歴史学の方法を確立しようとしていた。

さらに、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (London School of Economics and Politics, 以下 LSE) にてシュンペーターが受講したシドニー・ウェブの講義において、プラグマティスト, W・ジェイムズ の思想が議論されていた²。シュンペーターは LSE において S・ウェブの「社会調査の諸方法」という講義を受講しており³, この講義内容の後半には「酵母としての偉人」というテーマが議論されていた (LSE Calendar 1906-1907 p. 136)。ウェブはこの「偉人」という語を W・ジェイムズの著作から借りたとしており, その内容は, 歴史の軌道を決定するというシュンペーターの企業者概念と非常に近い。

本稿では, 次節にてシュンペーターの方法論に関する研究史を振り返り, その後, 第 3 節において, シュンペーターが『本質と主要内容』と『経済発展の理論』を執筆するまでに, どのような経路からプラグマティズムの影響を受け得たかを考える。第 4 節では塩野谷の道具主義を再考し, 議論の発散を防ぐために 1900 年代当時, プラグマティズムを広めた中心であったジェイムズの著作『プラグマティズム』を中心として, 彼のプラグマティズムの思想とシュンペーターの方法論との比較を行い, その関係を論じる。そして, 最終節では本稿における議論の総括を行う。

2. シュンペーター方法論の研究史

2.1 理論と歴史

1911 年の『経済発展の理論』に至る過程を描く研究は二方向からのアプローチが必要である。すなわち理論の側からのアプローチと、そしてドイツ歴史学派からの影響を中心とするアプローチである。前者の研究には、シュンペーターの方法論を最も早くから体系的に論じた F・マハルプがいる。彼はその論文 (Machlup 1951) の中で、シュンペーターが方法論争のような論争の「無益さ」を強調し、最初の著作『本質と主要内容』において、その調停を目的としていたことを強調する。そして同書においてシュンペーターが、こうした対立の原因を、それぞれの方法論を用いる者の「資質」や「精神的傾向」 (Schumpeter 1908 訳 上 p. 102) の違いに帰していることを示した。

マハルプの議論において重要なのが、シュンペーター体系における、方法論上の「変節」である。シュンペーターは『本質と主要内容』において、「因果的説明」を使う事を避け「関数関係」を重視した。例えば市場の価格決定において、様々な諸要素は複雑な相互関係を持って存在しており、限界効用を説明するような心理学的な要素や、もしくは費用価値説と言ったものが価格決定に関する最終的な原因ということは言えない。一般均衡論の枠組みの中では「心理的要因としての効用はもはや価値現象の究極的原因では無く、経済体系全体の解として特定の値をとるに過ぎ」ない(塩野谷 1995 p.140)。つまり、原因と結果が一意に結びつくような単純な図式は市場のような複雑な機構には当てはまらないのである。しかしマハルプは、シュンペーターが「1911年(『経済発展の理論』)には、早くも因果関係に対する嫌悪をすて」(Machlup 1951, p.97, f.27)たと述べる。経済発展は企業者という経済発展の究極的な原因を特定するものであり、これは『本質と主要内容』における態度とは相いれない。それが関数関係であれ、因果関係であれ、シュンペーターは「経済理論」を重視するという態度を変えることは無かったが、マハルプはこの「変節」に至った経緯の詳細や、その原因までは論じてはいない。

塩野谷(1995)は、シュンペーターが意見を変えたというこの見方について、「経済体系における内生変数の間では関数関係(一般的相互依存関係)のみが存在」し、「体系の外にある一組の外生変数によって一義的に決定される」という意味では、因果関係を語ることが出来る」(塩野谷 1995 p.382)と述べる。また、彼はシュンペーターが『主要内容』において展開した方法論を「マッハ流の道具主義」と見なし、さらにこの方法により「方法論争」の融和や「動態」的方法の確立まで説明している。この問題については第4節でより詳しく論じる。

シュンペーター自身、均衡理論を中心として『本質と主要内容』を展開しており、その方法論についての研究は、彼が一般均衡理論や数理体系を如何に支持したか、という点に重点が置かれていた。しかしもう一方で、「方法論争」の融和という点について、彼がシュモラー率いる「ドイツ新歴史学派」を如何に受容し、理論体系に取り入れたかという観点からの研究も行われてきた。例えば大野忠男(1971)は、シュンペーターがゾンバルトやウェーバーに学んだ社会学者であるという側面を重視し、「歴史の科学的認識」をもって、社会科学の目標としていたことを強調する(大野 1971, p. 407)。大野(1971)が考えるシュンペーターの方法とは、まず純粋理論の「本質」吟味をした後、利子や景気循環を説明する動学的研究へと進むわけであるが、静学は永遠の反復過程であるのに対し、「動学」は「同型性と進歩の後退からな

る**社会学モデル**」(ibid., p. 410)と見なされる。シュンペーターは『主要内容』において、動学という新しい領域について「努力」や「エネルギー」、そして「企業者」といった概念の導入を示唆している(ibid., p.413)。大野はまた、シュンペーターがマルクスの進化的経済理論を高く評価し、「歴史的進化」や「歴史的仮説」を扱い得るモデルを目指していたことを指摘する(ibid., 425)。つまりシュンペーターの動学、もしくは経済発展理論は「進化的」な体系から「歴史」を説明するものと見なしうるのである。

また吉田昇三(1974)は、ウェーバーとシュンペーターが「方法論争」に対し、どのような方法論上のアプローチをとったかを比較した。吉田によると、方法論争は彼等の「方法論的考察の直接の動機となってはたらいだ」(吉田1974, p.62)のであり、両者は理論的研究と事実的研究(歴史的・統計的研究)が相補的であると考え、その総合の場として「経済社会学」を勧めていった(p.63)。しかしオーストリア学派のシュンペーターとドイツ歴史学派のウェーバーがそれぞれ異なる基盤に立ち、シュンペーターは理論の側面から、ウェーバーは歴史の側面から、それぞれの論を展開したことも併せて強調する。

ユルゲン・オースターハメル(1986)もまた、ウェーバーとシュンペーターの関係を方法論の立場から広範に論じている。オースターハメルによると、理論経済学者を自認するシュンペーターは、ウェーバーを経済学者とは見做さなかった。しかし、シュンペーターの問題関心の多くは広義の意味における「社会経済学」の領域に存在し、それらを理論に包摂するための幅広い基盤を持っていた。オースターハメルもまた、「方法論争」のような論争についてシュンペーターは「エネルギーを消耗させる歴史」という表現を使っており、オーストリアンでありながら、この論争におけるメンガーの意見を支持していなかったことを強調する。

一方でシュンペーターは価値判断を含むウェーバーの議論を「無条件で承認」(p.123)したのであるが、しかし「ウェーバーの立場が示すような新カント派の複雑さにはほとんど興味を示さなかったし、そこに内包された認識論的並びに倫理的意味内容を見做した」(p.123)したことも併せて強調する。また、両者とも経済学の独立性を主張し、限界効用主義の基礎として心理学を置くことにも反対した。ウェーバーは「限界主義の命題は心理学にではなく、『実際上の(pragmatic)』仮定、すなわち日常生活における『商業計算』に適用される『目的』と『手段』の概念に基づいている」(p.123)とする。つまり、これが現実についての説明ではなく、観念上構成されたものであり「分析をさらに進める道を発見的に切り開くのに有用である」という事が、限界主義者の主張だったことを理解していたのである。

オースターハメルはまた、両者は普遍的実在を否定する「唯名論者」の立場を好んだと考える。しかし、そのよって立つ基盤は異なり、ウェーバーは「新カント学派」の認識論に、そしてシュンペーターは H・ポアンカレの「規約主義」にそれぞれ影響を受けていることを指摘した。この立場は当時のオーストリア学派内でもラディカルなものであり、シュンペーターは同学派内でも異端であったことになる。一方ウェーバーは「価値関係の概念に心を奪われて」(p.124)おり、シュンペーターが切り離れた「文化的意味の問題」に関心を向けてはいたが、両者は「方法論的構成(構築)主義」という見解を伴にしているとする。シュンペーターは『景気循環論』において、経済モデルが「有用なフィクション」であり、「道具」であるとする一方で、完全に恣意的なものというわけでもなく、その作成者は一般的なビジネスマンも保持しているような既存の理論と前科学的な実際知を備えていると考える。オースターハメルによると、こうしたシュンペーターの方法は「ウェーバーの理念型を使用する考えと密接に関連」しており、「その精神をもって行動する者の一人として現れる」という。

また、両者は方法論的個人主義においても同様の立場をとった。双方とも、マンチェスター主義的な政治的な個人主義的価値体系とは一線を画し、あくまでも分析のために個人主義を利用したのである。

このようにオースターハメルは、①経済理論の自律性を保持しようとする事、②唯名論者であり構成主義の立場をとること、そして③理念型の方法を、確信をもって選好することにおいて、最期に④方法論的個人主義の擁護という4点において両者の思想における接近性を示した。

2.2 塩野谷の「道具主義」解釈

『主要内容』から『経済発展の理論』に至るシュンペーターのビジョン形成は、「理論」を主眼としながらも同時に歴史的仮説を受容するプロセスであるので、そのプロセスを解明するためには当時の理論的方法と歴史的方法の双方の考察が必要となる。「方法論争」の融和と、そして「経済発展」を説明する体系構築のために必要な方法論を、塩野谷(1995)はマッハ流「道具主義」に求めた。

塩野谷(1995)が想定する道具主義とは、「理論とは記述では無く、有益な結果を導くための道具であって、それ自身は真でも偽でもない」と主張する見解」(p.107)を言う。また、彼はポパーやボーランド、ネーゲル、モーゲンベッサーらの道具主義の定義を丹念に整理し、道具主義の中心的概念を①「理論は現象を分類・組織化し、説明する事」であり、②「理論では真偽を判断

することが出来ない」事の2つに集約した。また副次的主張として、道具主義が a)「帰納問題」への一つの対応手段であり、b)理論が現象の本質を記述するという「本質主義」に反対するものであり、c)道具主義が実在主義にも反対するものであることを明らかにした(塩野谷 1995, pp.116-117)。

塩野谷(1995)はシュンペーターがこの道具主義によりワルラス流の静学理論の正当性を説明し、また歴史分析との目的の違いを強調することで、それぞれの重要性を確保し、いわゆる方法論争を融和に導いたという。

塩野谷はさらに、道具主義が「動態」分析や、さらには「経済社会学」にも適用された、という仮説を立てた(P.237)。つまり、「仮説から演繹された理論それ自体は記述的言明ではなく、事実を理解するための道具」、すなわち恣意的な構成物であり、事実によって裏付ける必要はない、という主張を拡張し、“静学的な分析の正当化”という枠を超えて、動態分析を含めたシュンペーター体系の根幹をなすと考えたのである。彼はシュンペーターが理論的な体系を基盤としながらも「理念型」をはじめとするウェーバーの方法論に近づいていたことを強調し、その原因である方法論的基盤こそシュンペーターの「道具主義」であると主張する。塩野谷(1995)のこの解釈は有力な説として、現在までシュンペーター研究者の間でも支持されている。

3. プラグマティズムとしての解釈

3.1 『経済発展の理論』発表までのシュンペーター

1908 年に出版されたシュンペーターの最初の著作『理論経済学の本質と主要内容』は、彼自身が述べているように認識論的・方法論的著作であり、1911 年の『経済発展の理論』とは「姉妹本」とされている。マハルプも指摘している通り、前者は「関数関係」の擁護を、そして後者は「因果関係」の受容を示しており、この矛盾をどう解釈するかが問題となる。塩野谷(1995)は双方が「道具主義」によって解決可能であると考えた。

それでは、シュンペーターが『主要内容』の執筆までにどのような経緯を辿ったのかを概観したい。彼はウィーン大学において、古典派や歴史学派、そして限界主義者らの経済学に出会った(マクロウ p.51)。彼の在学中には、いわゆる方法論争は既に下火となり、総括の時期を迎えつつあった。歴史学派の中心的人物であった M・ヴェーバーは 1903 年から 1906 年まで「ロッシャーとクニース」(Weber 1903-1906)を執筆して古い歴史学派の問題点を指摘し、1904 年には「社会科学と社会政策にかかわる認識の『客観性』」(Weber 1904)において社会科学的方法と研究者の関心に関する問題を、そして 1906 年には「文化科学的論理の領域における批判的諸研究」(Weber

1906)において、歴史学における「価値分析」の重要性を議論していた⁴。

シュンペーターはオーストリア学派のフォン・ベーム＝バヴェルクのゼミにおいて、ベームの静学的経済学とマルクス主義者の動的な経済学との論争にも触れた。ここで、ベームの中心的議論であった「利子」や、マルクス主義が関心を寄せる「恐慌」⁵についての問題意識を身に付けた。シュンペーターは力学のアナロジーを用いた純粋経済学では「恐慌」の様な歴史的な問題の解明に適さないことをすでに知っていた⁶。ワルラス流の抽象理論は経済システムの作用の理解に必要であるが、実際の現象を説明するためには、なぜ利子や恐慌が発生するのかという「原因」の説明を含む歴史的な問題も検討しなければならない。つまり恐慌や利子現象の検討は、同時に方法論争の総括の問題にも関与していることになる。吉田(1974)も指摘したように、ヴェーバーが歴史学派の側から方法論争を融和しようとしたのに対し、純粋経済理論(静学)を支持していたシュンペーター(1908)は事実報告や記述的研究からのアプローチ⁷を、新しい理論体系(動学)を構築するための基礎(Schumpeter[1908], 訳/下, pp.387-388)として包摂することを目指していた。

こうした問題意識を持ってウィーン大学を出たシュンペーターは1906年、遊学のためヨーロッパ各地を訪れた。まずはボン大学において「国家学」の夏季セミナーを受け、シュモラーやゾンバルトと言った新歴史学派と知己となる。しかし、R・L・アレンによると、そこで直面した理論への不寛容に反感を覚えて最初の著書の執筆を決意した(Allen p.59)という。そしてパリを経て、同年の秋に英国ロンドンを訪れたシュンペーターは、LSEにて社会科学の講義を受けている。そして1907年の暮れまでロンドンに滞在した後カイロに渡り、1908年の春に、当地で『本質と主要内容』を完成させた。

その後、ウィーンの私講師を経てチェルノヴィッツ大学の講師に就任したシュンペーターは当地で『経済発展の歴史』を執筆し1911年の晩秋に同書を完成させる。彼が名声を得た同書の構想におけるアイデアは1905年のベーム・ゼミにおける議論が基になっており⁸、1907年にはアイデアの幾つかは形となっていたという⁹。

3.2 シュンペーターを取り巻くプラグマティズム

ここまで『経済発展の理論』に至るまでのシュンペーターの足取りを追ってきたが、それでは当時、プラグマティズムはどのようにアカデミックで受容されていたのであろうか。W・ジェイムズは1898年、カリフォルニア大学バークリー校にて「哲学の諸概念と实际的効果」という講演を行い、C・

S・パースの「プラグマティズム」に基づく思想を議論した。この講演の後に「アメリカのみならず、ヨーロッパの各国で、この思想に共鳴する哲学者、思想家たちが名乗りをあげ」（伊藤邦武 2016 p.16）たのであり、結果としてこの思想が「西洋の有力な思潮の一つであるという評価」を得たという。しかし W・ジェイムズによると、こうした思潮は「多くの相異なる見地から起こったがために、歩調の合わない言説が多く表れる結果に」（James p.7）なった。こうした流れの中にドイツ歴史学派のマックス・ウェーバーもいたのであろう。¹⁰ウェーバーは、1904 年の『客観性』論文や 1906 年の「批判的諸研究」において、たびたび「プラグマティッシュ」という語を使い、後者では W・ジェイムズの「心理学」を引用している。また、内田芳明(1968)は、ウェーバーの歴史・社会学的方法がプラグマ論として特徴づけられることを著作で議論している。内田はウェーバーがプラグマ論を「合理的」・「実践的」に分けていることを説き、後者の「実践的プラグマ論」についてはプラグマティズムからの影響もみられるものの、ユダヤ的・キリスト教的倫理思想やカントの実践倫理の思想などを総括して表現するものとして捉えている。

ウェーバーの他にも、例えばシュンペーターが LSE の社会学科において受講した「社会調査の諸方法」を担当した S・ウェッブもまた、プラグマティズムに影響を受けていた。彼の講義シラバスにある講義内容を見てみると、ウィリアム・ジェイムズの言葉とされる「酵母としての偉人」という項目がある。この語は重要なので少し詳しく検討しよう。ウェッブの講義では将来の「予測」に関する問題として、いわゆる平均人(Average man)の仮定の下に、直近の未来予測を行いうる可能性が検討されていた。しかし他方で、政治や経済の歴史の長期的予測が不可能であるというテーマも見られる。夫人の B・ウェッブはロンドン社会学会報告において「社会調査の諸方法」という報告を行って居るが、その報告の中で「我々の科学の範疇外」にあり予測を難しくする要因として、「気候の変動」,「新たな発明の影響」,そして「偉人(Great man)の出現」などが挙げられていた。S・ウェッブによる LSE の講義シラバスでも取り上げられているこの「偉人」という言葉について、ウェッブ夫妻(1932)はウィリアム・ジェイムズからの引用であることを明らかにしている。

…重要なものは、その精神力や倫理的天性において、あるいは思索や行動において、あるいは文武において例外的な優秀さを示した人々の生である。これが全く予想されぬまま一つの社会を転覆し、

他の社会を創造する事すらあり得る。ウィリアム・ジェームズは、このような人物を社会の酵母と呼んだ。その人は、たとえ自分でそれと知ることがなくとも、まったく計り知れぬほど大きな影響を同時代の社会に及ぼしうるのである。しかし思想、情動、パーソナリティの力がどれほどの影響力を持つのか考察することは、われわれのただ今の目的からは必要なことではない。これらの影響因はいずれも、およそ単独にではなく、社会関係や社会関係に織り込まれた制度を創造し、変形する限りにおいてのみ、必然的に社会学の領域に入ってくるのである。

(S. Webb and B. Webb [1932], 訳, p 4)

つまり偉人の存在が「酵母」の役割を果たして社会を転覆し、「社会関係に織り込まれた制度」に変形をもたらすものとされる。

ジェームズの「偉人」のように、歴史の流れを人間の知恵や意欲の所業として理解するような方法を、B・クロウチェ(1916)は「ヒューマニズムの歴史」、もしくは「プラグマティック実証主義的歴史」と呼んだ。しかし、クロウチェはこの思想に合理主義的・唯知主義的、抽象的、個人主義的、心理的歴史観という特徴を充て、この歴史的方法を「機械的図式」として強い論調で非難している。ジェームズが合理主義や唯知主義を特に支持しているわけではなく、こうした歴史観も「歩調の合わない言説」(James 1907)の中に数えられるであろう。しかしプラグマティズムや「酵母としての偉人」の議論に基づく「歴史観」が当時「プラグマティズム」の一分派として見なされていたことを示すものであろう。

4「プラグマティズム」としてのシュンペーター方法論の再解釈

4.1 道具主義とプラグマティズム

シュンペーターの最初の著書、『本質と主要内容』の目的の一つは、その序文にも記されている通り「方法論争」のような論争の融和にあった(Schumpeter [1908], 訳, pp. 20-21)。シュンペーターもヴェーバーに続き「方法論争」の総括を試みるのであるが、彼は『本質』において「自然科学」と「精神科学(後に、新カント派の文化科学という語に包摂される)」という二分法について、「事実上決して無害では無い」(Schumpeter 1908, 訳/下, p.362)と批判する。純粋経済学は方法論上から見ると「自然科学」ではあるが、それでも「経済学」は同時に、内容的には「精神科学」であり、経済学は両方の領域に跨っている¹¹という。では、彼が参照した方法論とは何だっ

たのか。『本質』を書くにあたって、彼がプラグマティズムを採用したと読める記述がその序文において現れる。

いふなれば、「実用主義的な手法」(pragmatisches Vorgehen)によって、われわれの判断は、まったく一般的にその判断を把握しようとする場合よりも遥かに厳密になるばかりか、論争の鋭さも大いに減殺され、まったくおのずから解消されるであろうし、また双方の当不当がきわめて明らかになるであろう。私はさまざまな箇所でも殊更この問題に触れ、これをいろいろな視覚から考察することに努めよう。(Schumpeter [1908], 訳/上, p.21)

ジェイムズ(1907)は『プラグマティズム』の第1章において、この思想が「合理論」と「経験論」の対立のような、形而上学的な様々な論争を解決するものであることを示している。よって、この言葉をそのままプラグマティズムと解することも出来る様に思われるのだが、この言葉が何を示すかについては議論がある。塩野谷(2005)は、シュンペーターの言うプラグマティッシュ(pragmatisch)がE・マッハ流の「道具主義」を示しているという立場を取る。¹²この塩野谷の立場は「有力な解釈」(佐々木 [2018], p.41)として長く通用していた。¹³しかし、本稿では、代替的な仮説として「プラグマティッシュな方法」を文字通り解釈し、プラグマティズムが彼の参照した方法論であった可能性を考える。そのためにもう一度、塩野谷の「道具主義説」を詳しく吟味しよう。

塩野谷(1995)はマッハ流の“道具主義”について、①理論は有益な結果を導くための道具であり、そして②それ自身の真偽は問わない。という2点に注目する(塩野谷[1995], p.107)。①の「有益な結果」としては「予測」だけでは無く、E・ネーゲルの解釈に依って、「説明」もまた、道具主義における理論の役割として設定する。

塩野谷は同時にポワンカレの「約束(規約)主義」と、「プラグマティズム」についても検討し、ボーランドの定義を借りて、三者の立場を次のように論じる。A)まず一定の目的に対する理論の実際的な有用性を強調する点では道具主義とプラグマティズムは等しい。しかし、B)真偽を問わない道具主義に対し、プラグマティズムは有用な理論については真として認める点では異なる。C)理論選択において約束上の基準が与えられているとする点において、規約主義とプラグマティズムは等しいが、約束主義ではこうした基準について、D)真偽判断を行わない一方で、プラグマティズムでは真偽判断を行うと

いう点で両者は異なる。しかし、3者とも「反実在主義」的であるという点、観察不可能な理論的仮説に対し、存在論的な身分を否定するという点では共通しているとされる(塩野谷 1995 p.123)。この分類を持って塩野谷はシュンペーターの『本質と主要内容』におけるテキストを分析するのである。

ボーランドの定義であるB)とD)を見れば分かる通り、プラグマティズムには「有用なものを真とする」という極めて簡単な定義が与えられている。しかし、プラグマティズムの真偽観は、それほど単純なものとも言い切れない。プラグマティズムの言う「真理」とは「観念＝実在」が直接に成立するところで得られるものではない。パースやジェイムズが言う「真理」とは、皆が「真」と認めることにより成立しているのであり、後になって偽と判断されうる「可謬性」をも認めるものである。ジェイムズは「絶対的真理」を「それに向かって集中するに至ると想像される消極点(vanishing point)」(James[1907],原書,pp.222-223, 訳,p.223)と述べた。しかし山根秀介(2017)によると、「絶対的真理」とはある種の「理想・理念」の様なものであり、実際に生じることが不可能である(山根[2017], p.221)。¹⁴また、山根(2017)によると、ある観念が真とされるのは、それが「何らかの形で部分的に実在と一致しており、その限りにおいて真であると言ってよいが、それが完全な真理でないのは、他に無数に存在する真理のすべてと整合的であるわけではない」(山根 [2017] p.221)からである。¹⁵

さらに、パースは「真理」と「実在」について、「すべての研究者が結局は賛成することがあらかじめ定められている意味こそ、私たちが『真理』という言葉で意味しているものであり、こうした意見によって表現されているものこそ『実在』に他ならない」(Peirce [1877], 訳, p.99)と表現する。魚津郁夫(2005)によると、パース流の真理の探究とは「疑念から始まって信念に到達しようとする努力」であり、「他の多くの探究者が同意したとしても、さらに疑念が生じる可能性」(魚津[2005], p.88)がある。つまり、先だって真と認められたような観念についても、後に偽となる可能性を常に含んでいる。

また、ジェイムズは「真理」がある種の「信用組織」によって成立すると主張する。われわれの思想や信念は、「それを拒否するものが無い限り」において「通用」するのであり、これはちょうど「銀行手形がそれを拒む人の無い限り通用するのと同じ」(James [1907], 訳, p.207)である。その探求プロセスとしての「科学は、仮説のみを用いて、…常にそれを実験と観察によって検証することにつとめ、無限の自己修正と増進への道をひらく」のであり、絶対的真理とは「理想的(ideal)な消極点」(ibid., p. 223)である。さらに、実際の生活における「真理」の有用性もまた、きわめて条件付きのものであり、「(ある

観念が)実在と一致すべき(という)我々義務は,具体的な便宜という大密林に根差して」(ibid., p.233)いる。つまり,ある観念の有用性は,その観念が置かれている局面に左右されるのである。

仮にプラグマティズムに有用なものを「真」であるとする基準があったとしても、絶対的な実在に至る点は極限にしか存在しない「理念的」なものであり、そこに至るかどうかもわからない。もしそうであるとするならば、プラグマティズムは真偽判断を一意に(有用性という判断を基盤として)決定するものではない。そうだとすると(ボーランド＝塩野谷解釈に照らすと)道具主義や規約主義をも包摂しうる、より柔軟な方法論となる。つまり道具主義とプラグマティズムは分割しがたく、ボーランドの定義によるシュンペーター方法論の同定は説得力を失う事になる。また、塩野谷はたびたびマッハ流の「恣意の経済性」がシュンペーターに見られることも指摘している(塩野谷 p.134)が、これもジェイムズの『プラグマティズム』において言及されている。

こうした事情を考慮に入れても,マッハ流の道具主義説は、シュンペーターが相互依存関係を関数として記述する理論を受容するため,静学上の非現実的な,様々な仮定を認め,その有用性の方を重視したという範囲では説得力がある。しかし、道具主義によつては,彼が『本質と主要内容』において「静学」と「動学」の区別を受容し,さらに『経済発展の理論』において「静態」,「動態」としてこれを発展させた理由までは説明がされていないように思われる。例えば塩野谷は以下の五点により,「静学」と「動学」の区別が道具主義的解釈に由来することを強調する。

- 1) 歴史的仮説は観察可能な現象の世界についての言明でありうる。
- 2) 歴史的仮説は観察の及ばない事実を再構成する場合には,経験的テストを必要とするが,理論的仮説は恣意的な構成物であり,道具的目的を果たすことができれば,それ自身真である必要はない。
- 3) 歴史的仮説は成果としての認識を表すが,理論的仮説は単なる方法的な補助物であって,それ自身は何の意味もない。
- 4) 歴史的仮説に基礎をおかなくてはならないが,理論的仮説は非現実的であってもかまわない。
- 5) 歴史的仮説は意見の相異の対象となりうるが,理論的仮説にとっては,現実性は問題ではなく,有用性のみが問題である。

しかし、これを見るとマッハの道具主義により説明されるのは、有用性を基準とする純粹経済理論の仮説における恣意性であり、理論を拡張して「動学理論」や「発展理論」に至ったプロセスを説明していないように思われる。歴史的過程を含む「動学」の理論化には「事実—歴史的な、狭義の記述的な、統計的な、そしてまた直接われわれの周囲に見られる事実—を、手にはいる限り多数観察」し、収集した事実を「その単なる分類によって可能な以上に、簡潔に記述」(Schumpeter 1908, 訳, 下巻, p.482-483)しなければならない。動学の設定には記述的な経済史からの抽象が必要であり、シュンペーターも動学の素材である経済史について、ドイツ(歴史学派)の著作の中にヒントを求めるように促している。

プラグマティズムはあくまでも「事実に執着」するものであり、経験的事実の方に重点が置かれているが、他方で「抽象物が現実的に…実りを結ばせるものである限り」(James [1907], 訳, p.80)異議をとなえるようなものではない。その思想は、それぞれ気質の異なる「合理論者」と「経験論者」の両者の「要求を満足させることのできる一つの哲学として」(ibid., p.40)提唱されたものである。シュンペーターは「理論」と「記述」について、方法論の違いだけではなく「異なる資質と精神的傾向の持ち主」(Schumpeter 1908, 訳, 上巻, p.102)がそれぞれを担っていることを述べている。プラグマティズムはジェイムズもシュンペーターも論じていた通り、様々な方法の対立を無効にするものであり、双方の適用範囲を確定することで対立の構図を無効にしたと考えられるが、それでは「動学理論」や「発展理論」はどのように「経済発展の理論」に包摂されていったのか。

4.2 歴史的方法とプラグマティズム

シュンペーターがLSEにおいて受講した、S・ウェエブによる講義は、決定論的議論と「偉人」の攪乱による歴史的不確定性の議論を含む。この「偉人」の議論はジェイムズ(1896)の論文集『信ずる意志』の中の第7章「偉人とその環境」に基づいている。この議論は歴史の進化論的解釈において、ダーウィニズムを援用し、決定論を特徴とする古い進化主義理論を克服する試みと見ることが出来る。

同論文でジェイムズは、まずスペンサー流の決定論を否定する。当時流行していたスペンサー流の哲学の観点では、ある現象を説明するためには、その環境におけるあらゆる要因を知っていなければならない。例えば「少年が雀

を石で落とす」という特定の現象は、それが生じた様々な環境要因から説明される。

どんな些細なことにしろ、何事かに完全に通曉するためには、全宇宙についての知識が必要だろう。一羽のスズメも、その墜落の何らかの遠因が銀河のうちに、わが国の連邦組織のうちに、さらにヨーロッパ古代史のうちに見出されなければならないならば、地に落ちはしない。言い換えるならば、宇宙はそのかぎりにおいて現在のあるところの状態と違った宇宙になるであろう。(James [1897], 訳, p. 277)

もし宇宙が現状と異なる状態にあったとすると、その特定の瞬間に雀に出会う事も、石を投げようなどという心情も起こらなかったかもしれない。スペンサーは社会を構成する様々な要因を、それが取り巻くあらゆる**環境**から説明できると考える、「人間行動の予定説」の立場を取る。しかし、「知性が、一目見ただけで時空の全体を捉えることが出来るほど、全知であり偏在的である」(ibid., p.279)という事はある得ず、人間の心は、「何か注目すべきもの」をより分け、視野を限定しなければならない。

ジェイムズによると、環境のみからによって歴史を説明することは、科学的精神というよりは「東洋的宿命論」(ibid., p.312)であり、ダーウィン以前の古い進化論によって歴史を説明しようとする、「時代錯誤的」(ibid., p. 323)なものである。古い進化論¹⁷では「変異」と環境に対する「適応的变化(adaptive change)」(ibid., p.284)という別個の現象を同じ系統のものとして説明したため、目的論的な進化哲学が形成されてしまった。すなわち、キリンの首が長い理由とは、高いところにある木の葉を食べるためであり、目的に応じて適応が働き、その形質までも変化したことになる(ibid., p.283)。

しかしダーウィンは実際の現象における原因の多元性を認め、環境に対する「適応」という現象と、首が長くなるという「生物学的」な現象（すなわち「変異」）とを、「同じ標準では測れない」(ibid., p.285)異なる系統から生じたものとして区別した。適応とは、いわば「環境に対する反射」であり、環境からある程度説明が可能な現象であるが、他方で「突然変異」の方は微小な生物学上の原理に由来する(ibid., p.285)。進化という現象を説明するためには本来、これら両方の系統の説明を必要とするのである。

そして、社会現象における「変異」こそが、他の主体と異なる能力を持つ「偉人」である。

偉人の影響によって環境はまるきり独自で特異な流儀の変更を被る…**偉人が一酵母の役目を演じ**,環境の構造を変えるのはちょうど動物学上の新種が,その現れる境域の動植物の均衡(the faunal and floral equilibrium)を変えるのと同じである…
(ibid., 原著 p.226 訳 p.288)

そしてこの偉人は,「歴史」のコースを決定づける力を持つ。

天才の酵母的影響力は,社会の進化を形作るかすかすの変化のうちの一要因として認められなければならない。社会は多くの行程をたどって進化しうる。あれこれの酵母が**たまたま**現れることによって,社会がどんな行程をたどって進化するだろうかが決められる。(原著 p.227 訳 p.292)

歴史の行程は前もって定まっているものではない。しかし,こうした「非決定状態」(訳 p.293)は,ある程度環境の制約を受ける。個人は「率先権」や「創始権」を持つが(訳 p.295),他方で社会環境は個人に対する「拒否権」を持つ。「個人の推進力が無ければ社会は停滞」するであろうし,また「社会の共感をえなければ個人の推進力は死滅」(訳 p.295)してしまう。社会進化の説明には「二つの全く違った因子の相互作用」を考慮しなくてはならない。第一の因子は「個人であって,それ特有の才の由来するところは生理的ないし前社会的(infra-social)な力の働きであるが,率先権や創始権はすべて個人の手中に収められて」いる。また「第二の因子は,個人並びに個人の才を適用するか,拒否するかを決める力を持つ社会環境」(ibid., p.295)である。個人の推進力がなければ社会は停滞するが,その個人は社会の共感を得なければならない。¹⁸こうしてジェイムズの社会進化論は完結する。このように、ジェイムズの議論は,進化の概念を考慮に入れた,歴史理論という事が出来る。

ところで、シュンペーターが欧州に遊学に出る前,マックス・ウェーバーは1904年に書かれた『客観性』論文において、自然科学の「実践的価値観点」に立ち、一般的・合理的な体系の価値を認めている(Weber 1904, pp.102-103)。そして、既に抽象的経済理論に対して「市場に依存する事象の連関が、実在のなかでなんらかの程度まではたらいっている、と確定または推定される場合、われわれはその連関の特性を、一つの理念系に照らし、プラグマティック(原文)に把握できるように描き出し、理解させることが」(ibid., p.112)できるとする。ここでは、事象の連関に関する「実在性」が仮定されており、

さらに「理解」や「説明」が成果と見なされるという道具主義的主張がされており、この「理論」の把握方法もまた、『本質と主要内容』と同様の意味で「プラグマティズム」として解することが出来る。

しかしウェーバーは他方で、この方法がそのまま歴史に適用できないことも指摘する。シュンペーターが遊学を始めた 1906 年、ウェーバーは「文化科学的論理の領域における批判的諸研究」(Weber 1906)において、歴史学の課題について「経験的に与えられた外的な諸行為とそれらの結果を歴史的に与えられた行動の『諸条件』や、『目的』と『手段』とから理解することにある」のであり、「『動機の探究』一別に言えば実際に『意欲されたこと』とこの意欲の『原因』の分析―は、一方ではあの歴史研究らしからぬプラグマ理論(原文)に陥らぬための手段であり、しかし他方では『歴史的な関心』がそこから出発する主要な起点の一つなのである」(ibid., 訳, 注[6], p.170-171)と述べる。内田芳明(1968)は、この引用に出てくる「歴史研究らしからぬプラグマ理論」が、パースやジェイムズの「アメリカ的プラグマティズム」を指すと考える。それではプラグマティズムは歴史研究には応用不可能なのかと言うと、そういうわけでもない。さらに同書を先に進めると、ウェーバーは、歴史家 E・マイヤーが人間の「自由意思」や「非合理性」を強調しすぎていることを示し、次のように述べている。「人間の行動はこれ程純粋に合理的には解され得ないということ、事実についての人間の非合理的な偏見、思い違い、そして誤認のみならず、気質とか気分とか激情とかもまた人間の自由をかき乱すという事、したがって彼の行動もまた、『自然現象』のような経験上の無意味さを持つということ、このことはまさに、**純粋にプラグマティッシュな歴史学(原文)の不可能性の条件**」(p.31-32)となる。つまり、自由意思を非合理的なものに見なしたり、激情のようなそもそも非合理的なものを強調しすぎると、「人間行為の動機」から因果連関を捉えるという**純粋にプラグマティックな歴史学**が成立しないというのである。内田(1968)はこれを、ウェーバー独自の「プラグマ的方法」として独自の観点からその後のウェーバーの著作を論じている。

4.2 プラグマティズムと経済発展論

ジェイムズの議論とウェーバーの議論にどれほどの関連があるかは未だ解明されていない課題であり、ここでは問題としないが、両者の「プラグマティズム」と「プラグマ的方法」をシュンペーターの「発展理論」に見出すことは難しいことでは無い。

ジェイムズによる社会進化の図式は、シュンペーターの「発展」観とほぼ

正確に重なるものである。例えばシュンペーターが『経済発展の理論』初版(1912)の第7章は、環境理論(Milieutheorie)¹⁹に対する反駁から始まる。しかしこの環境理論がどういったものかについて、これまでほとんど議論されてこなかった。彼は、「経済発展が現実存在する」(Schumpeter[1912], 訳, p. 431)ことを強調しつつ、環境理論について以下の様に述べる。

この観点(静学的立場:筆者)よれば、経済はつねに、その時々と与えられた社会的、地理的、民俗学的、一般文化的な環境に異議的に適応しているのであって、それが変化するのは、これらの環境的要因自体が変化するときだけ、またその限りにおいてである。経済的発展の原因と駆動力もまた、経済にとって前提であると同時に条件であるこの環境のなかに存在していることになる。言い方を変えれば、経済それ自体のなかから生じたような、固有な意味での経済発展というものは存在せず、すべてが一体となった発展、あるいは…経済の世界をも変化させるような経済外的な社会的発展が存在するだけである。(ibid., p.431)

『信ずる意思』の内容に即して考えれば、この環境理論が何を指しているかは明らかである。純粋経済理論は経済主体が、それを取り巻く環境に対して反応する様式を記述するものであり、経済における環境決定論である。主体の行動を分析、予測したい場合、環境をすべて列挙することで「問題は解くことができるだけでなく、その解の一意性も厳密に示される」(ibid., p.427)。多くの経済現象は実際に「適応的」であり、静態的方法は「経済の科学的基礎」であって、この見方は「抽象的構成物として正当化されるだけでなく不可欠なもの」(ibid., p.432)とされる。しかし、最良の学者も支持するこうした見方は「発展の現象に関する理論家の沈黙の根底」(ibid., p.432)を成すものとなる。すなわち、もっともよい理論家でさえも、発展の問題には口を閉ざざるを得ない。

では、発展の抽象化である動態的理論をどのように考えるべきだろうか。彼は『景気循環論』(1932)において、両者の関係を以下の様に論じている。

例えば犬の組織体を取り扱うときには、観察されるものの説明は容易に二つの部門にわかれる。われわれは犬の体内に進行している生命過程(process of life)、たとえば血液の循環、その消化器官との関係などに興味を持つかもしれない。しかし…このことは犬と

いうものが一体どうして存在するようになったかを記述することにも理解する事にもならないだろう。明らかに,この場合われわれは淘汰とか,突然変異とか,一般的にいつて進化というような異なった事実と概念とを含んだ別の過程に当面している。

(Schumpeter[1939], 原書, pp.36-37, 訳, p.51)

通常の「生命過程」,すなわち「静態」において示されるのは「循環」であり,内的システムは相互依存しており,関数関係で表すことが出来る。仮に環境において変化が生じれば,それは与件の変化となって「適応的」に新たな均衡へと向かう。²⁰しかし,これはなぜ犬がこのような形になったのかは説明しない。²¹そこに必要なのは,「進化」という別の説明である。動態的現象を扱うためには,ジェイムズ流の社会進化論と同じく,経済発展に影響を与える原因,すなわち「酵母(ferment)」としての「偉人」が,純粹経済学とは別の系統のシステムとして,経済体系の内部に見いだされなければならない。そして,静態を攪乱させる主体としてシュンペーターが見いだしたもののこそが「企業者」による「創造的反応」である。

シュンペーターは「企業者」の行動が,「人種的に同質な人口の間では,おそらく他の身体的特性とまったく同じように分布」(Schumpeter [1926], 訳/上 p.216 n)しているものとして,これが「遺伝的」な系統の要因であるとする。企業者が起こす「創造的反応」とは,「関連するすべての事実を完全に承知している観察者の視点からすれば,必ず事後的に理解できるが,事前には絶対と断言していいほど理解されない」ものであり,「既存事実から推論する普通のやり方では予測」出来ない(Schumpeter [1947], p.88)。創造的反応によって「それ以降の事象の進路とその『長期的』結果が決定」される。そして「それが無かったならば生じていたであろう状況からこの新たな状況へ橋渡しすることは出来ず」,「いかなる決定論的信条も,決して役には立たない(ibid, p.89)」ない。このように,物理的環境が歴史的経路を決定するという機械論的決定論を,「変異」に相当する「偉人」が攪乱し,その後の歴史的コースを決定するというジェイムズの議論と,シュンペーターの「発展理論」は同じ構造を持つものであると言える。

前節でも論じた通り,彼が「静態」・「動態」の方法論的区別を導入した理由は,経済発展という「実際に存在」する(が,時間を通じて変化する)現象に対し,多元的な要因を認め,作業仮説として両者の方法の有用性を認めつつ,その具体的な帰結を明らかにすることにより「明晰」にしようという,プラグマティズムの適用にあったと言える。そして,ジェイムズの影響下にあった

シュンペーターが歴史と理論を統合し、経済の軌道を変更する要因としての「社会の酵母」たる「企業者」を見出したと考えることは、きわめて自然なことであるように思われる。大野(1971)も示しているように、シュンペーターの理論は「歴史的進化」や「歴史的仮説」を扱い得るものとして構築された「進化的」な歴史理論であった。ジェイムズの議論はシュンペーターの目指しているものと合致するのである。

さらに、シュンペーターは『本質と主要内容』では因果関係の追求を避け、関数関係にのみ議論を集中するという方法論上の観点から行い得なかった、企業者の「動機の解明」を『経済発展の理論』において試みている。これはウェーバー独自の歴史的方法論、**純粹にプラグマティッシュな歴史学**に由来しているのではないかと考えられる。ここでは「動機」と「結果」の分析による、人間行動の歴史的因果連関(内田 1968, p.13)を明らかにすることが歴史学の方法とされる。

クローチェの例にもある通り、当時の歴史学において、プラグマティック実証主義的歴史と言ったものが議論されていた。アメリカのプラグマティズムの影響を受けつつも、クローチェが論じた歴史学のように、その「派生物」として、ウェーバーの歴史学を位置づけられる可能性もある。しかし当時の時代背景における歴史学とプラグマティズムの全体的な関係については不明な点が多く、さらなる研究が必要である。

4. おわりに

シュンペーターは「道具主義」を『経済分析の歴史』等で明示的に示しており、塩野谷の道具主義解釈は非常に有力な仮説としてシュンペーター研究者の間でも受容されてきた。しかしこの説があまりに有力で、新たな仮説が出てこないとすれば、それも残念なことであろう。

本項の議論では、ウェーバーとプラグマティズムの関係や、当時の歴史学によるプラグマティズムの応用がどのように行われていたかを議論できなかった。本研究の行く手には課題が山積しており、なかなか全体像が明瞭に表れてこない。しかしこの研究を出発点として、シュンペーターと当時の「理論」・「歴史」の双方における認識論的、方法論的な背景に関するさらなる研究を進め、知識を蓄積して、より精度の高い議論が出来るよう努めたい。

参考文献

- 伊藤邦武[2016]「プラグマティズム入門」ちくま新書
- 上山春平[1980]「プラグマティズムの哲学」上山春平編『パース・ジェイムズ・デューイ：世界の名著』中央公論社 pp.5-50.
- 魚津郁夫[2006]『プラグマティズムの思想』ちくま学芸文庫
- 内田芳明[1968]『ヴェーバー社会科学の基礎研究』岩波文庫
- 大野忠男[1971]『シュムペーター体系研究』創文社
- 金指基[1979]『J・A・シュムペーターの経済学』新評社
- 木田元[2014]『マッハとニーチェ』講談社学術文庫
- 小林大州介[2015]「単線的発展論の超克としての初期イノベーション理論」『経済社会学年報』37号 pp.203-212.
- 佐々木憲介[2018]「経済理論における因果関係と相互依存関係ーシュンペーターはどのように考えたのかー」『経済学方法論の多元性ー歴史的視点から』只腰親和・佐々木憲介編 蒼天社出版 pp.17-49.
- 塩野谷祐一[1996]『シュンペーター的思考ー総合的社会科学の構想』東洋経済
- 八木紀一郎[1993]「シュンペーターとウィーン大学」『経済論叢別冊・調査と研究』第5号 pp.63-83.
- 八木紀一郎編訳[2001]『資本主義は生きのびるか』名古屋大学出版会
- 山根秀介[2017]「ウィリアム・ジェイムズのプラグマティズムにおける実在とその認識」『哲学』68号 p.215-230.
- 吉田昇三[1974]『ウェーバーとシュムペーター』筑摩書房

- Bergson, H.[1907] *L'Evolution créatrice*, Paris:PUF,(真方敬道訳,合田正人・松井久訳『創造的進化』ちくま学芸文庫,2010年)
- James, W.[1896:1956] *The Will to Believe and Other Essays in Popular Philosophy*, Dover Publications, Inc,(福鎌達夫訳ウィリアム・ジェイムズ著作集,第二巻『信ずる意志』日本教文社,2015年)
- James, W.[1907] *Pragmatism-A New Name for Some Old Ways of Thinking*, Longmans, Green, And Co: New York, London, Bombay and Calcutta.(榎田啓三郎訳『プラグマティズム』岩波文庫,1957年)
- Kobayashi, D.[2015]“Schumpeter as a Diffusionist – a new interpretation of Schumpeter’s socio-cultural evolution”, *Evolutionary and Institutional Economic Review*, 12(2) 265-281.
- McCraw, T.K. [2007] *Prophet of Innovation: Joseph Schumpeter and Creative Destruction*, the president and Fellows of Harvard College.(八木

- 紀一郎監訳,田村勝省訳『シュンペーター伝—革新による経済発展の予言者の生涯』一灯社,2010年)
- Osterhammel, Jürgen. [1987] “Varieties of Social Economics: Joseph A. Schumpeter and Max Weber.(「二つの社会経済学—シュンペーターとウェーバー」)” In Mommsen, Wolfgang J. (ed) [1987] *Max weber and his contemporaries*, Allen & Unwin. 鈴木広, 米沢和彦, 嘉目克彦監訳『マックス・ヴェーバーとその同時代人群像』, ミネルヴァ書房, 1994年)
- Peirce, C. S.[1877:1960] “How to Make Our Ideas Clear” in *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, Vol.,I-VI, ed by Charles Hartshorne and Paul Weiss, Harvard University Press, (上山春平訳「第二章 概念を明晰にする方法」『パース・ジェイムズ・デューイ：世界の名著』中央公論社)
- Schumpeter, J.A.[1908] *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, Leipzig: Duncker & Humblot.(大野忠男,木村健康,安井琢磨訳,『理論経済学の本質と主要内容』,上・下巻 岩波文庫,1985年)
- Schumpeter, J.A.[1912] *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, Leipzig: Duncker & Humblot, (八木紀一郎,荒木詳二訳,『シュンペーター 経済発展の理論(初版)』,日本経済新聞出版,2020年)
- Schumpeter, J.A.[1926] *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung: Eine Untersuchung über Unternehmergewinn, Kapital, Kredit, Zins und den Konjunkturzyklus*, Munich and Leipzig: Duncker & Humblot,(塩野谷祐一,中山伊一郎,東畑清一訳,『経済発展の理論』上・下巻 岩波文庫,1977年)
- Schumpeter, J.A.[1932] “Development”, *Journal of Economic literature*, 43, 2005: 108-120. Translation by Marcus Becker and Thorbjørn Knudsen of the typescript for the unpublished “Entwicklung: Festschrift für Emil Lederer: Zu seinem fünfzigsten Geburtstag am 22. Juli 1932”. Für <www.schumpeter.info> herausgegeben von Hans Ulrich Esslinger
- Schumpeter, J.A.[1934] *The Theory of Economic Development: An Inquiry into Profits, Capital, Credit, Interest and the Business Cycle*, Cambridge: Harvard University Press.
- Schumpeter, J.A.[1935] “Geleitwort zur vierten Auflage” in *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*: Schumpeter(1987) *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung: 7 auflage*, Duncker & Humblot:Berlin 1987.
- Schumpeter, J.A.[1947]“The Creative Response in Economic History”, in *The Journal of Economic History*, Nov.1947. (清成忠男訳「経済史における創造的反応」『企業者とは何か』東洋経済)
- Schumpeter, J.A.[1954] *History of Economic Analysis*, Oxford University

- Press Inc,(福岡正夫,東畑精一訳,『経済分析の歴史』岩波書店,2006年)
- Shionoya, Y.[2005]The Soul of the German Historical School – Methodological Essays on Schmoller, Weber and Schumpeter, Springer.
- Spiegel, H.W.[1971]“Institutional Economics” in *The Growth of Economic Thought*. Duke University press;Durham, North Carolina.
- Taymans, A.C.[1950] “Tarde and Schumpeter : A Similar Vision ” in *Quarterly Journal of Economics*, vol.LXIV.
- Webb,B. [1907] “Methods of Investigation” in *Sociological Papers III*. 345-351.
- Webb, B. and Webb.S.[1932] 1932. *Methods of Social Study*. London. New York. Toronto; Longmans, Green and Co. 川喜多喬訳『社会調査の方法』東京大学出版会.
- Weber, M. [1904] Die » Objectivität 《 Sozial Wissenschaftlicher und Sozialpolitischer erkenntnis. Archive für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 19. Tübingen: J.C.B.Mohr. 富永祐治,立野保男訳,折原浩補訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫.
- Weber, M. [1906]Kritische Studien auf dem Gebiet der kulturwissenschaft und Sozialpolitik. Bd. 22, S. Tübingen: J.C.B.Mohr. 祇園寺信彦, 祇園寺則夫訳『歴史学の方法』講談社学術文庫.

参考資料

Sociological Papers Vol 3, [1907] published for the Sociological Society, London Macmillan & Co., Limited: New York.

The London School of Economics and Political Science. (University of London.) Calender 1906・7 , published by LSE.

¹ 例えば大野忠男(1971)は,シュンペーターが「ドイツ歴史学派の子」(大野[1971], p.82)であり,シュモラーの歴史的方法からの強い影響を指摘する。また,吉田昇三(1974)は,彼がオーストリア学派の影響の下,理論に立脚しつつ論争の超克を目指したと考え,歴史学派の直系である M・ヴェーバーとの比較を行っている。

² 1905年から1907年度のLSE-Calendarを提供してくれたLSE図書館のArchivistであるSue Donnelly氏に感謝の意を表したい。メールでのやり取りではあったが,氏は筆者の

求めに応じ、目的の資料を的確に、即座に探してくれた。

³ 『経済分析の歴史』参照(Schumpeter [1954], 訳/下, p.157)

⁴ 塩野谷(1995)は、「マックス・ウェーバーの方法論もまた方法論争を解決するための試みであって、新カント派とりわけハインリッヒ・リッケルトの認識論と深い関係を持っている」のであり、「新カント派は自然科学とは異なる文化科学ないしは歴史科学の可能性を主張し、ドイツ歴史学派の接近に対して哲学的・認識論的基礎」(塩野谷 1995, pp.236-237)を与えようとしたという。

⁵ シュンペーターは『経済発展の理論』第2版の序において、同書の構想が1905年に「恐慌」の問題とともに始まったことを示している。

⁶ 吉田(1974)によると、1906年、ウィーン大学在学中に書いた論文「理論経済学のための数学的方法」においてシュンペーターは「国家科学の多くの領域にとって歴史的観察の必要ことが否定されないのは、理論的研究によって社会政策上の意見をきめることの必要性が予断されないことと同じ」、「他のもの、たとえば、経済、恐慌、信用などは、数量的ではなく、純粋理論の思索過程の礎石とはならない」、「演繹には、いつも、出発点の帰納が先行しなければならない」などと述べ、すでに、純粋理論以外の問題群を峻別していたことが伺える(吉田[1974], pp.52-53)。

⁷ これは、ベーム・ゼミ参加者のマルクス主義者から影響を受けたと思われる。

⁸ シュンペーター(1911)『経済発展の理論』初版序文

⁹ シュンペーター(1935)『経済発展の理論』英語版序文

¹⁰ 今野(2020)によると彼の家庭は英米圏との交流が深く、また1904年には心理学者ミュンスターベルグの招待で、セントルイス万国博覧会の国際芸術会議に招待され、渡米している(p.70)。

¹¹ また、シュンペーターは『経済分析の歴史』において、新カントについて「彼らは自然の法則と文化的発展の法則とのあいだに、あるいは法則の定式化と歴史的叙述との間に、まったく非現実的な分割線を引き、社会諸科学の大部分がこの分割線の両側に跨っているのを忘却した」と述べ、リッケルトの議論に影響を受けたものの名前として、ヴェーバーを挙げる(Schumpeter 1954, 訳/下 p.48)。

¹² シュンペーターはウィーン大学で「力学の哲学と歴史」と題される講義を受講しており、同講義ではマッハが扱われたことも伺われる。彼の純粋理論支持を説明するものとしては、この主張自体は妥当なものである。

¹³ 近年、佐々木憲介により、この言葉をプラグマティズムとして解釈する可能性も論じられている。佐々木(2018)は真偽判断の問題をシュンペーターが保留しているという見解をもって、プラグマティズムの決定的な影響については詳述を避けた。

¹⁴ 山根は、ジェイムズの真理が絶対的なものというよりも濃淡を持ったもの、すなわち程度差を許容するものとして説明する p.221

¹⁵ こうしたジェイムズの真理観は、マックス・ヴェーバーの「理念系」の概念と近いものを感じる。しかし本稿では紙幅の関係上、この議論に深入りすることを避ける。

¹⁶ おそらくこれらの記述は、西南学派の二分法を彷彿とさせるであろう。しかし、シュンペーターは『本質と主要内容』でこうした二分法を否定しているのである。

¹⁷ この「古い進化論」については、「単線的発展論の超克としての初期イノベーション理論」(2015)か、もしくは“Schumpeter as a Diffusionist-New interpretation of Schumpeter’s socio-cultural evolution”(2015)参照されたい。筆者は両著作において、啓蒙主義から続く進化主義(Evolutionism)と呼ばれている思想を定義している。

¹⁸ 社会学は本来「個人」という因子を念頭に置かなくてはならないが、当時の社会学は傑出した「個人」の役割を軽視していた。彼は同書第8章の「個人の重要性」において、以下の様に論じている。

私個人としては、平均や一般法則やあらかじめ決定された傾向に関する現今の社会学派ならびに個人的相異の重要性にたいする頭ごなしな過少評価を、きわめて有害で非道德な宿命論と見なさざるを得ない。ある社会的均衡は、それがそうなる宿命にあるとしよう。—それはあなたの好みに合うだろうか、それとも私の好みにあうだろうか。そこに問題の中心がひそんでおり、しかもこのことは平均の研究では到底決められることではないのである。(James [1897], 訳, p.332)

¹⁹ この「環境理論」(Miliutheorie)という語は、『経済発展の理論』原書の目次において現れる。(Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung p.XLIX Inhaltsangabe).シュンペーターは同時に、成長理論(Wachstumstheorie)に対する反論も行っている。彼がJ・B・クラークや、A・マーシャル流の成長理論に対する反駁を行っていたことに関しては、すでに様々な議論がある。例えば塩野谷(1995p.196)を参照のこと。

²⁰ シュンペーターが「経済発展」について、「有機体の生物学的発展」(すなわち成長)とは「形式的にも物質的にも関係を持つものでは」(Schumpeter [1908], 訳/上, p.316)ない、と言う理由には、その体系が進化主義的意味での「成長」を表していなことを主張したかったからではないか。

²¹ シュンペーターは『経済発展の理論』の英語版において、「静学」と「動学」の区別が、いわゆる「文化進化論」と「重要な点において類似」していることを指摘する(Schumpeter [1934], p.lxiii)。そしてジェイムズは、「社会進化の事実」が、ダーウィンの生物進化理論、すなわち「変異」と「適応」の理論との間に注目すべき相似関係があることを指摘している(James[1907], 訳, p.276)。